

貧困の博物館

田丸雅智 × 出雲充

Sustainability Fiction

視界を埋めつくさんばかりの淡いピンクの連なりに、これが本場の桜並木かとほくはひとり感動する。

あたりには屋台がたくさん並んでいて、「刺身」「天婦羅」「寿司」などという文字が躍っていた。その中から「お好み焼き」と書かれた店に近づき自動翻訳で一人前を注文すると、店主が笑顔でそれを包んで渡してくれた。

ベンチに腰かけ、ひとり頬張る。青のりやカツオ節の香りが鼻を抜け、甘辛いソースの味が口いつばいにふわっと広がる。

本格的な日本食の食堂はいま通っているバンングラデシユの大学にもあって、お好み焼きも何度も食べたことがある。でも、本場の味はぜんぜん違うな、と感慨深い気持ちに包まれる。

すっかりお腹が満たされると、ぼくは立ち上がって目の前の巨大な建物を改めて眺めた。ガラス張りの壁面からは中の盛況ぶりがうかがえて、さすがルーブル美術館やピラミッドと並ぶ世界屈指の観光スポットだけあるなあと思わされる。

そのとき、全身がふるつと震えた。

もしかして、とほくは思う。これがおじいちゃんの教えてくれた、日本語の「武者震い」というやつだろうか、と。

しつかり学んで、これからのことに活かさないと……。
そんな決意を胸に秘め、その建物——貧困博物館のゲートをくぐる。

絶滅した恐竜を展示する恐竜博物館があるように、貧困が世界から根絶されたあかつきには、きっとかつて存在した貧困を展示する「貧困博物館」というものができるとしよう。みんなで貧困の根絶を達成し、その貧困博物館をつくりませんか？

そんな提案を行ったのは、今から100年ほど前、2006年にノーベル平和賞を受賞したムハマド・ユヌスさんだけど、当時はシャレた言い回しだと感心して終わらせてしまう人も少なくなかった。それほど貧困問題は根が深く、根絶は困難だと思われていたからだ。

が、ユヌスさんたちはあきらめず、本気で信じてひたすら実行しつづけた。その追い風となったのは2015年に国連サミットで採択された通称「SDGs」というもので、掲げられた17の目標の達成に向けて全世界が初めて真剣に取り組んだ。

その結果、ついに人類は貧困を根絶することに成功した。そしてそれを記念して、21世紀の終わりが、ついに日本に貧困博物館が建てられた。

……と、歴史の授業で習って以来、ぼくもぼんやりいつか貧困博物館に行ってみたいなあ
……と思っていた。が、そもそもその貧困というものについて、正直なところピンと来ていない部分もあった。もちろん知識としてはある程度のことには知っていたし、おじいちゃんからも昔のバングラデシュの貧困のことを聞いたことがある。でも、ぼくの生まれた頃のバングラデシュはすでに豊かな大国で、過去の貧困はどうしてもフィクションの世界の話のように感じてしまうところがあった。

まあ、貧困はもうないわけだし、別に実感がなくても困らないよな……。

そう思う一方で、本当にこれでいいのか、というモヤモヤしたものもあった。そして、その気持ちは少し前、ある問題の解決に取り組む国際的なプロジェクトチームに参加してからますます強くなっていき、ぼくはこう決断した。

貧困博物館に行ってみよう、と。

それですっきりするかは定かじゃなかった。でも、試してみなければ分からないし、いまの活動に通ずる何かも得られるかもしれないと、貯金をはたいて人生初の日本に飛んだ。

いざ貧困博物館の中に入って最初に驚いたのが、暗い感じが漂っているところか、明るくてエネルギーが満ちていたことだった。展示の内容はもちろんシアスな

ものもあって、お客さんも真剣な表情で見ているのだけど、どの人の目も炎がともったように輝いていた。

その理由は、自分も順番に展示を見ていくうちに判明した。

どの展示でも過去の貧困の事実が伝えられているだけでなく、いかにして人類がそれを乗り越えてきたかについても手厚く紹介されていて、見ているうちに熱い気持ちになってくるのだ。音楽や照明などによっても雰囲気は盛り立てられていて、ぼく自身もおのずと鼓舞され高揚感に包まれた。

展示には、フロアごとにテーマが設けられていた。

あるフロアのテーマは「貧困をなくすための学校教育」で、そこでぼくは貧困問題の解決には物資の支援だけでなく、教育面での支援も欠かせなかったのだと知った。展示の一角ではまさにその教育を南スーダンに浸透させた人物の演説がホログラムで再現されていて、ぼくはひどく胸を打たれた。

また別のフロアでは「世界の飢餓と水問題の100年」というテーマで展示されていて、過去のバングラデシュのことも大きく取り上げられていた。それによると、21世紀前半までのバングラデシュではヒ素が多く含まれている井戸や川の水を飲んでしまう人が後を絶たず、身体を壊して満足に能力が発揮できないために結果として貧困に陥るというケー

スが多くあったのだという。展示ではその解決に向けて安全な水を提供したり啓蒙活動に励んだりした人たちのエピソードが並んでいて、ぼくは過去のバングラデシュでの貧困問題が少しずつ自分事になっていくのを感じはじめる。

あっ、と思ったのは、「昔、10億人の栄養失調者が世界にいた」というテーマのフロアに来たときだった。そこでぼくは、初代フロアマネージャーのホログラムと対面した。

その人は、この貧困博物館の設立メンバーの一人であり、かつて世界に10億人いたという栄養失調者をミドリムシの力でゼロにし、貧困をなくす鍵のひとつを担った人物だった。

そしてもうひとつ、ぼくのおじいちゃんの恩人でもある人だ。

不意に、おじいちゃんから聞いた話がよみがえる。

「ミドリムシが世界中の貧困地域で当たり前に食べられるようになったのは、私が生まれる少し前のことだな。昔は悲しくも、子供のころに栄養が足りなかったせいで大人になってからも身体や脳が未発達のままだという人が少なくなかったんだが、ミドリムシのおかげで状況は一気に変わったんだ。あれがなければサッカーのワールドカップで難民チームが優勝する日も来なければ、核融合発電所のトップにソマリア出身者が就く日も来なかったろうし、私だって音楽の道を志すことさえできなかっただろうなあ」

そのおじいちゃんは世界的なピアニストで、ミドリムシのこの人もいつかコンサートに足を運んでくれたことがあると話していた。

そのときのおじいちゃんのうれしそうな表情も相まって、ぼくは胸がいっぱいになる。目の前の人物は、ミドリムシにかける思いを語りつつける。

17フロアもある展示は一日では到底見られず、つづきは別の日に持ち越したとなった。そんな中、翌日はいったん展示を見るのは中断して、ぼくは併設された広場のほうへと足を運んだ。

貧困博物館の目玉のひとつ、貧困体験プログラムに参加するためだ。

それは文字通りかつての貧困な暮らしを実際に体験するというもので、参加後には世界が変わって見えるようになる。と老若男女に大人気のプログラムだった。コースは過酷さ別にイージー、ノーマル、ハードの3つが選べる中で、ぼくは1週間の合宿形式で貧困を体験するハードコースを迷わず申しこんでいた。

受付でほかの参加者たちと一緒にメデイカルチェックを済ませると、トイレとベッドだけが備わった簡素な小屋に案内された。

ここで一週間を過ごすわけか……。

想像以上にハードなことになりそうだなとごくりと唾を飲みこんでいると、スピーカーからスタッフの声が聞こえてきた。

「ようこそ、貧困体験プログラムへ。みなさまには、まず、近くの川を想定した給水所まで水をくみに行ってくださいませ」

ぼくは、やってやるぞと気合を入れる。

が、次に飛んできた言葉に思わずひるむ。

「給水所は歩いて1時間ほどのところにあります。往復で2時間、それを2回で所要時間は約4時間です」

スタッフはつづける。

「シャワーを浴びたい場合はくんできた水から使ってください。もちろんのこと、喉が渴いた場合もご自身のくんできた水をお飲みください。なお、過去の参加者の方で水が尽きて水たまりに口をつけ、腹痛でリタイアされた方もいらっしゃいますので、お気をつけください」

くらくらしながらもぼくはポリタンクを受け取りに行き、スタッフの先導のもとほかの参加者と一緒に出発した。

給水所にはなんとか予定通りにたどりつき、みんなで水をくみつつ喉をつるおす。

そのとき、ふとこんな考えが頭をよぎった。

この用意された水はきれいだけど、もしもこれが不衛生な水だったら……？ いや、実際の水は衛生的でないことのほうが多いはずで、そんな水を飲んだら腹痛どころじゃ済まないんじゃないか……。

ぼくはぞつとする気持ちを抱えながら、ポリタンクを抱えあげて歩きはじめる。そのポリタンクは水の重さが加わって、ずつしりのしかかってくる。これを毎日かと思うと絶望的な気持ちになりかけるも、あまり考えないようにする。

ようやく水くみが終わったところで、遅めの夕食が運ばれてきた。それを見て、ぼくは「あれ？」と首をかしげた。てっきり小さな干しイモのようなものが出てくるのかと思っていたのに、出てきたのは山盛りのカレーライスだったからだ。

でも、食べはじめてすぐにおかしなところに気がついた。ルーの中に具がひとつも入っていないのだ。

直後にスピーカーから食事の説明が流れてきて、ぼくは知る。貧困な暮らしの中でも砂糖や炭水化物は余るほどあった場合が少なくなく、問題はこのカレーのようにそれ以外のものが食べられず、栄養が極端に偏ることそこにあったのだ、と。

「そうだった……その問題を解決したのが栄養豊富なミドリムシなんだ……！」

前日に展示を見て得ていたはずの知識が、ようやく目の前のことと結びつく。展示だけでは本当の意味で理解できていなかった自分に恥ずかしさを覚えつつ、この体験プログラムの意義も痛感する。

少し休んだあとの早めの夕食も、同じ具なしカレーだった。それどころか、プログラム中は3食すべてがこのカレーだと知らされて、ぼくはげんなりしてしまう。

気を取り直して、歯でも磨こうかと考える。が、ここには歯ブラシがなかったことを思いだす。こんな暮らしたとすぐに虫歯になりそうだなあと思いつつ、もしそうなくても歯医者などないことに考えが至り、ぼくはその先を想像して絶句する。

夜は小屋に電気がないので、デバイスの充電ができずに退屈した。このために調達した紙の本でも読むかあと考えるも、滑稽ながら本を取りだしてみても初めて、電気がなければ満足に本も読めないことに気がついた。

ぼくは思う。

こんな環境では勉強なんか到底できなかったはずで、学べなければおのずと悪い職につくことができない。そうして負のスパイラルに陥って、貧困から脱出できない……。

それからの1週間は、正直なところ苦痛に満ちたものだった。途中でけだるさに襲われて、怖くなって常駐の医者のもとに駆けこんだ。すると念のた

めの検査のあとで、医者は言った。

「典型的な栄養不足の初期症状ですね。ハードコースではプログラムの範疇ですが、リタイアしますか？」

周りでは脱落者も出るなかで、ぼくは意地だけで首をぶんぶん横にふる。顔にはニキビがたくさんできて、口の中は口内炎だらけになった。考え事をしようとしても、頭がぼんやりしてうまく思考ができなくなった。

それでも気力だけで食らいつき、ぼくはとうとう1週間を乗り切った。そうして隣の休養施設で身体を休め、すっかり回復したあとだった。

スタッフから、最後にこんな言葉をかけられた。

「お疲れさまでした。プログラムはこれで終了ですが、現実世界ではこのあとずっと同じ暮らしが続いていたんです」

いまのぼくには、その言葉の重みが芯まで伝わる。

施設を出て外を眺めると、貧困のないこの世の中がいかに素晴らしいもののかを改めて痛感した。世界が輝いて見えはじめ、立ち並ぶ桜もいつそう美しく感じられる。

それと同時に、貧困問題を根絶した先人たちへの畏敬の念もこみあげた。偉大な先人たちにならって自分もがんばらないとな、とぼくは思う。

今度は、「メンタル面での貧困」を世界から根絶するために――。

かつてSDGsの達成に向けた奮闘の末、そのひとつ、貧困をなくすという目標はたしかに達成することができた。が、そのときには残念ながら完全には達成できなかったことがあった。

それが、差別やいじめなど、メンタルにかかわる問題の全面的な解決だ。

ぼくの所属しているプロジェクトチームの人たちは、それらをかつてあった「フィジカル面での貧困」に対して「メンタル面での貧困」だと位置づけた。そして、フィジカル面での貧困を根絶して心に余裕が生まれたこの時代だからこそ根絶できるものだと、本気になって動きはじめた。

加えてぼくたちが目指しているのが、世界中の人たちを「ウェルビーイング」に――つまりは身体的にも精神的にも社会的にもすべてが満たされた幸福な状態にすることだ。こちらも人類の積み上げてきた知をいしずえに、今さまざまなアプローチでプログラムの開発や実践に乗りだしている。

具体的な目標の発表も控えている。

100年前にならってチームで考案した新生SDGsがそれで、その中には差別やいじめの根絶、ウェルビーイングの実現に加え、世界的なイノベーションをさらに加速させて

いくためにも想像力や発想力の豊かな社会を実現するという項目も含まれていたりする。ともあれ、ぼくの心はかつてないほど燃えていた。

一丸となり、自分たちが世界を変えていくのだ、と。

旅のおかげで、新しい目標もできた。

フィジカル面での貧困を根絶してつくられたこの貧困博物館のように、目標のひとつ、メンタル面での貧困を根絶したあかつきには、ほくも博物館をつくりたいなど思っている。その名前は、メンタル貧困博物館、でどうだろう。